

「距離のパトス」はいつ可能なのか
——ニーチェ『道徳の系譜学』の記述をめぐって——

山村 浩

When is the 'Pathos of Distance' Possible?
—— Contradicting Descriptions in Nietzsche's *On the Genealogy of Morals* ——

Hiroshi YAMAMURA

Abstract

Nietzsche mentions two types of morality (slave morality and master morality) in *On the Genealogy of Morals*. He explains that slave morality is based on the resentment of the ruled, while master morality is based on the sense of superiority of the rulers. However, several inconsistencies are found in Nietzsche's description of master morality because there is a problem inherent in Nietzsche's concept of the 'pathos of distance' itself.

Nietzsche relates the sense of superiority of the rulers to the 'pathos of distance', presenting Roman aristocrats as an example. When an absolute distance exists between the rulers and the ruled, as it did under this ancient class system, the rulers have no concern for the ruled; that is, the sentiment of 'pathos' cannot occur. On the contrary, 'pathos of distance' occurs when the distance between the rulers and the ruled is relatively small, with the former becoming conscious of the existence of the latter. In other words, the 'pathos of distance' is the subsequent distorted sense of superiority of the ruling class in reaction to a sense of crisis at the sudden rise to power of the ruled class. It is conceivable that this conceptual problem has created a contradiction in Nietzsche's descriptions.

緒言

ニーチェはその思想的遍歴の最晩年に、「権力への意志」という概念にたどりつき、それを彼の哲学における世界の根本原理として定立しようとした。この概念の出自は一義的ではなく、たとえば若い頃に読んだショーペンハウアーの「意志」概念や十八世紀モラリストたちに触発されたであろう人間心理への考察、さらには同時代の自然科学の知識など、ニーチェは多くのものに負っている。¹⁾

自身、心理分析の大家を自任しているように、モラリスト的な深層心理の考察はニーチェの著作のいたるところに認められる。なかでも人間の権力感情の分析は、後年の「権力への意志」思想に直接つながるものである。しかし「権力への意志」の原理は、人間だけに当てはまるのではない。ニーチェはそれが、生物界はむろんのこと物質世界にも適用されうるといっているのである。なぜそれが可能

なのか。たとえば『善悪の彼岸』にこんな記述が見られる。

Gesetzt, daß nichts Anderes als real "gegeben" ist als unsre Welt der Begierden und Leidenschaften, daß wir zu keiner anderen "Realität" hinab oder hinauf können als gerade zur Realität unsrer Triebe – denn Denken ist nur ein Verhalten dieser Triebe zu einander – : ist es nicht erlaubt, den Versuch zu machen und die Frage zu fragen, ob dies Gegeben nicht *ausreicht*, um aus Seines-Gleichen auch die sogenannte mechanistische (oder "materielle") Welt zu verstehen?

われわれの欲望と情熱の世界だけが「所与のもの」であり、また、われわれの衝動の現実性だけが到達可能のものであると仮定するならば（というのも、思考はこれらの衝動の相互作用に過ぎないからなのだが）、試みに以下のような問いを立てることが許されないだろうか。すなわち、

それと似たものとしての、いわゆる機械的な（あるいは物質的な）ものを理解するのに、この「所与のもの」を用いれば十分なのではないか、と。²⁾

伝統的に思考と感情は、相反する対立的なものと思われてきた。ニーチェはそうした考えを斥ける。思考は感情の対立物などではない、むしろ欲望や衝動の「相互作用」の結果としてとして現れるものだというのである。ところで欲望や情動は身体に由来する。そして身体が物質世界に属している以上、衝動や情動の法則は、物質も含むあらゆる実在に適用されうのではないか。ニーチェはこう言っているのである。かくして情動や衝動に関する心理学的洞察が、世界原理としての「権力への意志」へと敷衍される可能性が開かれるのだが、ここにはいくつかの看過できない問題がある。第一に、人間的現象を思考と感情という枠組みで論じてよいのかという点。³⁾ 第二に、人間の欲望や情熱を「身体」に還元してしまっただけでよいのかという問題。⁴⁾ 第三に、身体的なものと物質的なものを同等視してよいのかという問題。⁵⁾

このような問題を包括的に論じるには、物質とは何か、精神とは何かという、哲学上の大問題を避けて通れなくなる。しかし筆者は、さしあたっては「権力への意志」思想の出自であるところの「人間心理の洞察」という領域にとどまり、そこでの問題性を徹底的に検証してみようと思う。そうして炙り出された問題点が、世界原理としての「権力への意志」思想にどう反映されているかを明らかにしようと思うのである。その際筆者は、さしあたり『道徳の系譜学』を考察の最初の手引きとして用いたい。この書物は一般的には、ニーチェのキリスト教道徳批判として読まれているが、⁶⁾ ここでは「権力感情」をめぐるニーチェの分析が広範に使用されており、それを「権力への意志」思想の検討につなげようと思うのである。⁷⁾

1. 二種類の道徳

『道徳の系譜学』第一論文におけるニーチェの道徳批判を要約すると、「よい」という価値語は、もともと「身分上の高貴」に由来しており、そこから高貴、高邁、高潔などの貴族的な特性が価値あるものとされていたのだが、その後、ユダヤ・キリスト教的価値転倒により、温和な者、力のない者、貧苦や抑圧を忍従するものが「よい」とされるようになったというのである。

daß vielfach noch in jenen Worten und Wurzeln, die »gut« bezeichnen, die Hauptnuance durchschimmert, auf welche hin die Vornehmen sich eben als Menschen höheren Ranges fühlten.

「よい」をあらわす諸々の言葉の中には、今なおさまざまな形で貴族的な人間がみずからを高位と感じる主要なニ

ュアンスが響いているのを確認できる（ということ）。⁸⁾

貴族的な人間の自己肯定的な感情。ニーチェはこれを「貴族道徳」と呼び、他方ユダヤ・キリスト教的なそれを「奴隷道徳」と名づける。

Während alle vornehme Moral aus einem triumphirenden Ja-sagen zu sich selber herauswächst, sagt die Sklaven-Moral von vornherein Nein zu einem »Außerhalb«, zu einem »Anders«, zu einem »Nicht-selbst«

貴族道徳が、自己への勝ち誇れる肯定から生まれ出るのに対し、奴隷道徳ははじめから、「外部」へ、「他」に向けて、「非自己」に対して、「否」をいう。⁹⁾

「外部」とか「他」とかいうのは、被支配者（奴隷）から見た支配者（貴族）を指す。抑圧する支配者は「悪」である。その反対である自分たちこそ「善」なのである。かくして、もともとは「よい」ものだった勇気や力強さなど貴族的な属性が、一転して被支配者の視点から「悪」とされる。これがニーチェのいう「ルサンチマンによる価値転倒」である。

このような価値転倒が大々的に起こったケースとして、ニーチェは古代ローマにおける支配者ローマと被支配者ユダヤの対立を挙げる。ローマ的価値評価においては、すぐれたもの力強いものこそ「よい」であった。ところがユダヤ的価値評価はそれを転倒させ、勇気や力強さは「悪」、温和や忍従が「善」ということになる。この価値評価の嫡子がキリスト教道徳であり、ニーチェによるとそれは、現代にまでいたるヨーロッパ二千年の歴史を支配しているのである。

注意しなければならないのは、ニーチェは、価値転倒そのものを問題にしているわけではないということである。強者に支配された弱者は、怨恨（ルサンチマン）を力で晴らすことができない。かわりに彼らは、価値転倒という、いわば精神レベルでの復讐を行う。これこそが問題だというのである。

Der Sklavenaufstand in der Moral beginnt damit, daß das *Ressentiment* selbst schöpferisch wird und Werthe gebiert: das *Ressentiment* solcher Wesen, denen die eigentliche Reaktion, die der That versagt ist, die sich nur durch eine imaginäre Rache schadlos halten.

道徳における奴隷一揆は、ルサンチマンそのものが創造的となり、価値を産み出すことではじまる。本来的な反応、すなわち行動による反応ができず、想像的な復讐によってだけ埋め合わせをする人間。そうした人間のルサンチマンがそれである。¹⁰⁾

逆に言えば、ルサンチマンを直接行動によって晴らすこ

ともできるわけで、その場合、「(前略)ルサンチマンは、現れたとしても即座に反応することで解消されてしまうので彼を毒さない」¹¹⁾ 行動によって晴らされなかったルサンチマンが内攻し、価値転倒の心理的動機として働くこと。ニーチェはこのプロセスの欺瞞性を批判しているのである。

かくして「奴隷道徳」においては、他者の否定を媒介として自己の肯定が行われる。「善い自分」という価値表象は「悪い他者」との対比から導き出されるのである。それでは「貴族道徳」における自己肯定と他者否定の関係はどうなっているのだろうか。

die Sklaven-Moral bedarf, um zu entstehen, immer zuerst einer Gegen- und Außenwelt [...] Das Umgekehrte ist bei der vornehmen Werthungsweise der Fall: sie agirt und wächst spontan, sie sucht ihren Gegensatz nur auf, um zu sich selber noch dankbarer, noch frohlockender Ja zu sagen, – ihr negativer Begriff »niedrig« »gemein« »schlecht« ist nur ein nachgebornes blasses Contrastbild im Verhältniss zu ihrem positiven, durch und durch mit Leben und Leidenschaft durchtränkten Grundbegriff »wir Vornehmen, wir Guten, wir Schönen, wir Glücklichen!«

奴隷道徳が成立するには、いつもまず対立的外界が必要とされる。(中略) 貴族的な価値評価法においては事情が反対である。それは自発的に働き成長する。それがおのれの対立物を求めるのは、単により感謝と歓びに満ちて、自らをいっそう肯定するためだけなのである。その評価法におけるネガティブな概念、「低俗な」、「下品な」、「劣悪な」などといった概念は、そのポジティブな、生と情熱とに徹頭徹尾浸された基本概念、「われら高貴なもの」、「われらすぐれたるもの」、「われら美しきもの」、「われら幸福なるもの」と比べれば、あとから生まれた、青ざめた対照像に過ぎない。¹²⁾

ニーチェは、貴族道徳における自己肯定が、本来的に「自発的に働き成長」したものであり、他者についての否定的な価値表象は、あくまで二次的なものに過ぎないと言っている。ところが別の箇所にはこんな記述も見られるのである。

Vielmehr sind es »die Guten« selber gewesen, das heißt die Vornehmen, Mächtigen, Höhergestellten und Hochgesinnten, welche sich selbst und ihr Thun als gut, nämlich als ersten Ranges empfanden und ansetzten, im Gegensatz zu allem Niedrigen, Niedrig-Gesinnten, Gemeinen und Pöbelhaften. Aus diesem *Pathos der Distanz* heraus haben sie sich das Recht, Werthe zu schaffen, Namen der Werthe auszuprägen, erst genommen [...] Das *Pathos der Vornehmheit und Distanz*, wie gesagt, das

dauernde und dominierende Gesamt- und Grundgefühl einer höheren herrschenden Art im Verhältniss zu einer niederen Art, zu einem »Unten« – das ist der Ursprung des Gegensatzes »gut« und »schlecht«.

むしろ「よい人間」自身が、すなわち高貴な者、力強い者、高位の者、高潔な者こそが、自分および自分の行為を、あらゆる低き者、低劣なもの、下劣な者、賤民的な者と対比しつつ「よい」ものとして、すなわち第一級のものとして感じ、評価したのである。彼らは、この距離のパトスから、価値を創造し、価値の名前を刻印する権利をはじめて手にしたのだった。(中略)すでに述べたように、高貴さのパトス、距離のパトス、より高い支配者の種族が、より低い被支配者の種族との比較において抱いた、持続的で優勢な全体感情ならびに根本感情、これこそが「よい」と「わるい」の対比の起源である。¹³⁾

つまり貴族道徳においても、「よい」は「わるい」との対比において見出されたのだというのである。一見してこれは矛盾している。一方では「わるい」は二次的な付加物にすぎぬといい、他方ではそうではないと言っているのである。読者はいったいどちらを信じればいいのか。

2. 距離のパトス

マックス・シェーラーは、ニーチェのルサンチマン論に関連して、復讐心というのは、自己の権利が傷つけられたり、当然与えられるべきものが与えられなかったりしたときに生じるものであり、はじめから奴隷根性を持っている奴隷は復讐心など感じないと指摘する。それゆえ平等な社会ではルサンチマンは生じにくい、同様にインドのカースト制度のような絶対的な不平等が存在する場所でもルサンチマンは生じない。むしろ「われわれの現代社会のように、政治的非政治的な権利の平等があり、形式的社会的平等が公認されているながら、実際面での権力や富、教育の不平等がある社会は、極度のルサンチマンが鬱積する。」¹⁴⁾ (Die Äußerste Ladung von Ressentiment muß demnach eine solche Gesellschaft besitzen, in der, wie in der unsrigen, ungefähr gleiche politische und sonstige Rechte resp. öffentliche anerkannte, formale soziale Gleichberechtigung mit sehr großen Differenzen der faktischen Macht, des faktischen Besitzes und der faktischen Bildung Hand in Hand gehen.)

すなわちルサンチマンは、単に他者から不当な扱いを受けただけでは起こらない。権利の平等が認められ、またそうしたものへの要求をもっているにもかかわらず、それが実際面において満たされていない場合に生じるのである。このような心理的事実をふまえた上で、シェーラーは、ニーチェのいうようなルサンチマンは、古代的な身分制度の

内部で醸成されるのではなく、むしろ近代人に固有の現象であると主張する。¹⁵⁾

シェーラーはニーチェのいう二種類の道徳のうち、「奴隷道徳」のほうに批判のターゲットをあてている。しかしその批判は「貴族道徳」のほうにも当てはまるのではないだろうか。ニーチェは支配者階層の被支配者階層への価値感情を「距離のパトス」(Pathos der Distanz)と呼んでいる。¹⁶⁾そこでは被支配者に対する支配者の、強烈な自負の感情が念頭におかれているのだが、もしも支配者と被支配者との間に絶対的な距離があるとしたら、はたしてそれは「パトス」の原因となるのだろうか。ある人間に強い感情を抱くには、それが自分と同じ平面上にすることが必要である。相手がまったく異次元の、動物のような存在だったら、そもそも人間的な感情など起こらないのではあるまいか。

『道徳の系譜』の別の箇所でも、ニーチェは人類の前史における国家成立のプロセスをこう説明している。

sie kommen wie das Schicksal, ohne Grund, Vernunft, Rücksicht, Vorwand, sie sind da wie der Blitz da ist, zu furchtbar, zu plötzlich, zu überzeugend, zu »anders«, um selbst auch nur gehaßt zu werden. Ihr Werk ist ein instinktives Formen-schaffen, Formen-aufdrücken, es sind die unfreiwilligsten, unbewußtesten Künstler, die es giebt: – in Kürze steht etwas Neues da, wo sie erscheinen, ein Herrschafts-Gebilde, das *lebt*, in dem Theile und Funktionen abgegrenzt und bezüglich gemacht sind, in dem Nichts überhaupt Platz findet, dem nicht erst ein »Sinn« in Hinsicht auf das Ganze eingelegt ist.

彼ら支配的民族は運命のようにやってくる。そこには理由もなく、理性もなく、配慮も口実もない。彼らは稲妻のようにやってくる。それはあまりに恐ろしく、突然で、有無を言わず、「異様」で、憎悪の対象にすらならない。彼らの仕事は本能的な造形的作用、あるいは造形の強要である。彼らは最高度の本然の芸術家、無意識の芸術家である。彼らが現れるところにはたちまち新しいものが生み出されるが、それは「支配」の生ける構築物なのであって、そこではさまざまな部分や機能は限定されつつ相互に関連を持ち、あらゆるものは全体という観点から「意味」を持たされているのである。¹⁷⁾

被征服民を前にした征服民の心にあるのは、国家組織の「素材」に対する芸術家的な形成意欲である。そこには人間的関心が介在する余地はなく、「距離のパトス」など生じ得ないであろう。

「距離のパトス」は人間的関心を前提とするのである。つまりそれは相手を「人間」と意識することから可能となるのであって、絶対の懸隔から生まれるものではない。別の言葉でいうと、距離のパトスとは、支配者の目に被支配

者が人間的風貌をもって映り出したときにはじめて可能となるものである。すなわち社会経済の発展によって支配層と被支配層の格差が狭まり、その過程で被支配層が人間としての存在感を示し出す。支配者はそれまで物か道具くらいに思っていた相手を、人間として認めざるを得なくなる。そのことは支配者の心に不安や危機感を呼び覚ますが、同時にその反動で誇りや自負心といったものを刺激する。これまで自明のものとしてあった優越の立場が、今や誇張されたかたちで主題化される。「距離」は、相手との距離が近づくによってはじめて意識的に自覚されるのである。¹⁸⁾

そう考えると「距離のパトス」とは、「距離」という客観的な事実がひき起こす感情ないしは情動ではなく、主観の内部で前景化され強調される「距離の意識」ということになろう。¹⁹⁾

「距離のパトス」とは、支配者と被支配者の間に絶対の距離があった時代の「高貴な」感情ではない。それは被支配層の社会的経済的な勃興に直面した支配層の危機意識のあらわれ、その反動としての屈折した自己防衛的な優越感情である。その意味でそれはすぐれて近代的な現象であるといえよう。²⁰⁾ここには明らかにフランス革命以来の同時代の社会状況が投影されていると考えられるのである。²¹⁾

3. 結語

本来、貴族的な価値意識というものは、下位の存在へのノンシャランさをともなうものである。ときにそれが苛酷さというかたちを取るにせよ、それさえもノンシャランな性格のものなのであって、およそ「パトス」とは無縁のもののはずである。人間が平等でないというのはニーチェの基本的なテーゼだが、区別や距離が存在することと、そこからパトスが生じるということは、おのずから別なことなのである。

心理的な自己防衛としての過剰な優越感情は、一種のコンプレックスのあらわれだろうが、コンプレックス自体は無意識の領域に深く抑圧されている。したがって優越感とは、実際には他者否定を契機としているのだけれど、そうした事実は否認され、あくまでも他者否定とは無縁の、純粹な自己肯定であると誤認されるのである。

『道徳の系譜学』の記述上の矛盾は、まさにこうした理由によるものである。「奴隷道徳」が、他者の否定を媒介とした自己の肯定だとしたら、「貴族道徳」は、他者否定によって媒介されつつもそれを否認し、肯定の無媒介性ないしは純粹性を主張しようとするものである。この二重に入り組んだ転倒のプロセスが、記述上の矛盾となってあらわれているのである。

註

- 1) ニーチェの作品からの引用は, Nietzsche, Friedrich: Sämtliche Werke. (Kritische Studienausgabe in 15 Bänden, Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, dtv / Walter de Gruyter, Berlin, 1999) に拠った. 本文中では『道徳の系譜学』の略号として GM を, 『善悪の彼岸』の略号として JGB を用いた.
- 2) JGB 36, KSA 5, S.54.
- 3) この点についてハイデガーは, ニーチェは「身体に対する精神の優位」という従来の思考を, 「精神に対する身体の優位」へと逆転させたに過ぎず, 依然として「理性と動物性」という伝統的な人間理解の枠組みの内部にとどまったままだと批判している. Vgl. Heidegger, M (1997) : Nietzsche, Zweiter Band. V. Klostermann, Frankfurt a. M., S. 112ff.
- 4) たとえばマックス・シェラーは, 情動や衝動の問題を「精神/肉体」とは異なるや第三の領域, すなわち「価値」の領域に求めようとしている. このような視点は, 価値問題を中核的な問題にすえているニーチェ哲学を考える際にはなほだ示唆的である. Vgl. Scheler, M (1954) : Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik. Franke, Bern.
- 5) たとえば身体に関するメルロ＝ポンティの議論など.
- 6) 『道徳への系譜学』との関連を前面に出して「権力への意志」思想を論じている点で, ドゥルーズのニーチェ論はきわだった存在であるが, 議論の中心はあくまでも世界原理としての「権力への意志」となっている. Vgl. Deleuze, G (1962) : Nietzsche et la philosophie. Presses Universitaires de France, Paris.
- 7) 筆者の目指すのはニーチェの道徳論の検討というよりも「権力への意志」思想の考察であり, 今回はその導入として, 「距離へのパトス」という概念に含まれる問題について論じ, その後, 稿をあらためて「権力への意志」思想全体の検討に入る予定である.
- 8) GM I . Abhandlung, KSA 5, S. 262.
- 9) Ebd., S. 270.
- 10) Ebd., S. 270.
- 11) Ebd., S. 273.
- 12) Ebd., S. 271.
- 13) Ebd., S. 259.
- 14) Scheler, M (1955) : Vom Umsturz der Werte. Franke, Bern, S. 43.
- 15) Ebd., S. 70ff.
- 16) Vgl. GM I . Abhandlung, KSA 5, S. 259.
- 17) GM II . Abhandlung, KSA 5, S. 324-325.
- 18) M. Risse は, ニーチェの他の著作も参照しつつルサンチマンの起源を, 人間の攻撃本能や自己意識の発生などに求めているが, この種の議論が見落としているのは, ルサンチマンという感情が可能となる歴史的社会的な条件なのである. Vgl. Risse, M(2003): Origins of Ressentiment and Sources of Normativity. Nietzsche-Studien, 32, 142-170.
- 19) たとえば遺稿には「パトスとしての距離」という表現も

見られる. Vgl. Nachlaß 1887, KSA 12, 9[153], S. 425.

- 20) 上に引いた箇所ではニーチェが芸術家の比喩を使っていたのは偶然ではない. 彼の生きた十九世紀後半は, 社会全体が大衆化しはじめ, 芸術家は「精神の貴族主義」によってそれに対抗しようとした時代である. 「選ばれたものとしての芸術家」の「距離のパトス」は, 危機意識と裏返しの選民感情である. 事実ニーチェの受容史において, 真っ先にニーチェを受け入れたのは同時代の芸術家たちであった.
- 21) ニーチェが問題としているのは社会的な階層ではなく, むしろ心理的な位階の問題であるという解釈もあるが, これは事実を反映していないだろう. 『道徳の系譜学』では, 語源学の知見に拠りつつ社会的な関係性としての「距離」を繰り返して問題にしているし, たとえば『善悪の彼岸』でも, 「距離のパトス」が身分上の差異に由来するとはっきり書かれている. Vgl. JGB 257, KSA 5, S. 205.

参考文献

- Brusotti, M (2001): Wille zum Nichts, Ressentiment, Hypnose., Aktiv' und ,Reaktiv' in Nietzsches Genealogie der Moral. Nietzsche-Studien, 30, 107-132.
- Deleuze, G (1962): Nietzsche et la philosophie. Presses Universitaires de France, Paris, 232pp.
- Gerhardt, V (1988): Pathos und Distanz. Reclam, Stuttgart, 221pp.
- Gerhardt, V (1992) : Selbstbegründung. Nietzsches Moral der Individualität. Nietzsche-Studien, 21, 28-49.
- Guth, A (1974): Nietzsche, Neue Barbaren'. Nietzsche. 19-26, In, Werk und Wirkungen. Vandenhoeck u. Ruprecht, Göttingen.
- Heidegger, M (1997): Nietzsche, Zweiter Band. Klostermann, Frankfurt a. M, 454pp.
- Heller, E (1992): Diesseits und jenseits von Gut und Böse: Zu Nietzsches Moralkritik. Nietzsche-Studien, 21, 10-27.
- Horn, A (2000): Nietzsches Begriff der décadance: Kritik und Analyse der Moderne. Lang, Frankfurt a. M., 380pp.
- Risse, M (2003): Origins of Ressentiment and Sources of Normativity. Nietzsche-Studien, 32, 142-170.
- Scheler, M (1954): Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik. Franke, Bern, 676pp.
- Scheler, M (1955): Vom Umsturz der Werte. Franke, Bern, 450pp.
- Schweppenhäuser, G (1988): Nietzsches Überwindung der Moral. Königshausen u. Neumann, Würzburg, 96pp.
- Stegmaier, W (1994): Nietzsches Genealogie der Moral. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 267pp.

要 約

ニーチェは『道徳の系譜学』の中で二種の道徳（奴隷道徳と貴族道徳）を挙げ、前者が被支配民のルサンチマンをもとに形成されるのに対し、後者は支配民の優越感情をもとに形成されると説明する。しかし貴族道徳をめぐるニーチェの記述にはいくつかの矛盾が認められる。それはニーチェの「距離のパトス」という概念自体に問題がひそんでいるからである。ニーチェは貴族的支配者の優越感情を「距離のパトス」と呼び、例として古代ローマの貴族を挙げる。しかし古代身分制のように、支配者と被支配者の間に絶対的な距離がある場合、支配者は被支配者に対して人間的関心を持たない。すなわちそこでは「パトス」という感情は生じ得ない。逆にいえば「距離のパトス」が生じるのは、支配者と被支配者の距離が相対的に狭まり、前者が後者の存在を意識するようになった時である。即ち被支配層の勃興によって支配層が危機意識を感じ、その反動で生じる屈折した優越感情こそ「距離のパトス」なのである。こうした概念上の問題が記述上の矛盾を引き起こしていると考えられる。